

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

見方を変える ～行動を見て、心を観る

サッカー2018 FIFAワールドカップ。

日本代表のグループステージ第3戦、ポーランド戦終了間際の戦い方には賛否両論が巻き起こりました。

「決勝トーナメントに進出するために結果を優先すべきだった」という見方。それに対して、「全力を尽くし、試合内容を重視すべきだった」という見方。

人は同じものを見ても、それまでの経験によって受け止め方が異なります。それは人の価値観の表れでもあります。

教師は善意で子どもに接します。しかし、受け止めるほうは曲げて取ることもあります。その結果誤解され、無駄な時間を浪費し、良好な人間関係を失ってしまいます。

しかし、見方を変え、ぶつからない指導ができたなら、信頼関係が深まり、かけがえのないものに変えられます。

今回は、同じ結果、行為でも、見方によって対応が変わり、子どもとの関係がよくなるだけでなく、子どもが成長するというテーマです。

1 困っている人はどっち？

授業中、前後の席でおしゃべりをしている二人。前に座っているA君は後ろを向いておしゃべりに夢中です。それに対して、後ろの席のB君はチラチラと教師に目をやります。

「どうやら、後ろを向いているA君が話しかけ、B君はそれに付き合っているという構図のようです。」

Q1

先生はどちらに声をかけますか。

- ①きつかけを作っているA君
- ②相手をしているB君
- ③両方
- ④声をかけない

おしゃべりしているのがこの二人だけなら、④という選択もあるでしょう。

他の子どもは迷惑しているわけではなく、おしゃべりが授業の妨害になっているわけでもありません。それに、声をかけたら授業が中断します。まじめに授業を受けている子どもたちの時間を奪うことになり、教師の叱責を聞くことで、自分も知られていく気分になってしまいます。

おしゃべりしているのは両方の子どもでも、③もおかしくはありません。

しかし、話しかけられたB君にすれば納得できない話です。話しかけてきたのはA君であり、自分是不承ながら付き合っただけです。

しかられるべきはA君だけだという思いがB君にはあるので、素直な気持ちで先生の叱責(話)を聞けません。反感をもつだけです。



また、A君と関わりと先生に知られる、迷惑な相手という偏見をもつことになります。一般的には、①のように、きつかけを作ったA君に声をかけるでしょう。

授業中のおしゃべりは学習ルールに反します。しかし、違反しているという意識がないので、おしゃべりを中断させられたという欲求不満が先生への反発につながります。

そこで、二人の行動を「見る」のではなく、二人の心を「観る」ようにします。すると、「チラチラと見る」という行為が「先生、助けて」とB君が困っているサインに「観えて」きます。

困っているのは話しかけられているB君です。その証拠に先生の反応をうかがっています。本当は話し相手をしたくないのでしょうか。でも、無下に断れない事情があるのでしょう。この苦境を救うのが教師の務めです。

そこで、②のようにB君に声をかけます。声をかけられたB君は「しかられる」と勘違いします。友達もそう思います。

そこで、B君を廊下に出して、教室に残っている子どもたちに聞こえないような声で話をします。

「君から話しかけたのではないことを先生は知っているよ。話しかけられたから相手をしたんだよね。」

話し相手にならない、注意をするのは難しいよね。だからといって今のように話し相手をしていると、おしゃべりしていることになるからルール違反になるよね。

君が困っているのを先生は知っているよ。だから、こうやって、おしゃべりの相手をしなく

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

給食が終わり、食べ終わった食器をトレイに載せて運び、食器かごに片づけます。かごは配膳台の上においてあります。子どもたちは配膳台の上にトレイを置き、それが床に落ちないように片手でトレイをもち、もう片方の手で食器を片づけます。

そんな時に、ガチャチャーという音がします。食器が割れた音です。割った子どもは茫然自失。教師は「怪我をしなかった？」と安全の確認をします。床には食器の破片があります。友達がほうきや新聞紙をもってきて後片づけをしようとしていますが、破片に触れると怪我をするので、「先生がやるから」と片づけを遠慮してもらいます。

2 「前」に目を向ける

「今回は廊下で説明したけど、次は『B君』って声をかけたり君の目の前に立ったりするよ。でも、それは君を助けるためだからね。しゃっているのではないよ」

B君は大きく頷き、教室に戻ります。しかられ、しよけて教室に戻って来ると思っていたB君の晴れ晴れとした表情に、教室に残っていた子どもたちは怪訝そうな顔をします。

この後、A君が後ろを向く瞬間に、「B君」と声をかけると、A君は話しかけるのを止めるようになりました。

Q2

片づけが終わり、皿を割った子どもにどんな言葉をかけますか。

- ① 「なんで割ったんだ！」
- ② 「もう一度やってみせて？」
- ③ 「ごめんなさいは！」

①は教師が子どもの過ちに憤り、それを爆発させています。

子どもは、「落としたから割ってしまったので」と答えますが、「そんなことはわかっています。『どろして落としたんだ』と聞いているんだ」と教師は怒りをさらに増幅させてしまっています。

これは、子どもに向かって叱責しているように見えて、実は、「子どもにこんなことをさせてしまう自分はダメな教師だ」と自分自身を否定しているのです。また、自分の感情をコントロールできない未熟さにも「大人気ない」と自己嫌悪に陥っているのです。それを認めたくない気持ちで子どもへの叱責に変わっているのです。

過ちを繰り返さないためにも原因をしっかりと確認させるのは大事なことです。この場合、指導よりも教師の感情が優先しています。残念ながら、子どもを責めることは自分を追い詰めることだと気づきません。

食器を割り、教師に後片づけをさせ、友達にも気を遣わせています。それに対して、謝罪と感謝の気持ちを伝えることは社会のマナーです。そういう思いから、教師は③のように謝罪を言葉にさせようとしています。

この二つは割った「後」の行動に目を向けています。ですが、大事なことは同じ過ちを繰り返さないことです。それには、②のように「前」、過去に注目させることです。

再現させると、トレイの半分以上が配膳台からはみ出してきます。これではトレイが落ち、食器を割るはずですよ。

「片手でトレイをもっていたの」と聞くと、首を振ります。早く片づけたかったので、両手を使って食器を戻したのです。ただし、このままではトレイが落ちるので、足（太もも）で支えているのです。

しかし、食器かごの向こう側に食器を置こうとした時につま先立ちとなり、足とトレイが離れ、食器を割ってしまったのです。

こうして「前」を振り返ることで、どこに問題があり、どうすればよかったのかを再確認できました。

人は無意識に行動していることが多いです。特に、子どもは後先のことを考えて行動していません。だから、失敗するのです。どうして失敗したのか。どのように改めたらいいのか。「前」を振り返ることで、適切な対応が再確認できました。

